宇治阿闍梨について

――宇治阿闍梨と中君との贈答歌をめぐって――

小西真智子

はじめに

宇治阿闍梨は、『源氏物語』の宇治十帖の前半の世界に登場してきて、まず、「聖だちたる」「才いとかしこくて、世のおぼえも軽からねど、をさをさ公事にも出で仕へず籠りゐたる」（橋姫の巻。引用は、日本古典文学全集本による。以下同じ。）と紹介される。仏教説話に出てくる高僧の典型を見るようである。真に高僧の名に値する高僧であることが解説されているわけであるが、彼の場合、この設定が一枚看板として貫かれる。ことばを換えれば、彼は単純に仏道に徹しきれている高僧である、と言うことができる。

その彼のあり方の意味を考えて、物語中のある具体的な場面―宇治阿闍梨と中君との贈答歌―の明確な解釈に迫りたいというのが、この稿の目的である。物語の中の一首の歌の趣を理解するには、その歌の置かれている状況を十分に認識することが必要であろう。さらに、それが贈答歌となると、互いのつながりとそこから生まれてくる一段の広がりとについての認識も、欠かせないものになってくると思われる。早蕨の巻でかわされる問題の贈答歌は、次のようなものである。

（阿闍梨）君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初わらびなり

（中君）　この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰のさわらび

父八宮に続いて姉大君にも先立たれて、傷心の極にあった中君は、この阿闍梨の歌で少し慰められる。知りたいのは、この時のふたりの心の触れ合いが奈辺にあるかということである。

一

宇治阿闍梨は、宇治に移り住んだ八宮の深い道心を尊んで、彼と交わりを結ぶようになるが、その尊敬の念から、事のついでにこのことを冷泉院の御前に披露する。阿闍梨はあくまで仏道のみに徹した人物で、八宮のことを話題にするのも、その仏道修行に励む尊さを述べたくてのことであり、それに対して冷泉院から「いまだかたちは変へたまはずや。」と、彼には難癖をつけられたように聞こえることを言われると、すぐさま説明を加えずにはいられなくて、「出家の心ざしはもとよりものしたまへるを」姫たちを思い捨てられないで嘆いておられるのですと力む。そして、まだ足りないと思ったのか、八宮が思い捨てられないのももっともなのですと言わんばかりに「げに」と言い出して、「さすがに物の音めづる阿闍梨にて、」姫たちの弾く琴のすばらしさを持ち出す。

その時冷泉院の御前には、薫も同席していた。これは、薫が光源氏の子であることを前提として、心を尽くす実父光源氏への配慮の一つと思われる冷泉院の寵愛が薫に注がれていたからであるが、冷泉院がそのようにしなければならないのと全く同じ事情で、実は薫にはその資格がなかった。冷泉院と薫は、密通の子という共通の運命を背負っているのである。中でもその点で本格的に取り上げられているのは薫である。冷泉院は知らされるまでそのことには全く気づいておらず、知ってからも譲位の意志をはじめとして光源氏への待遇に心を尽くすことで一応落ち着いている。彼は薫と比べる時、その世界の導入部分的存在であると言えよう。現状も誠に対照的で、かたや、秘密を知り得、阿闍梨の提出した話題の中で、副産物として出た八宮の姫たちの話に心を動かす冷泉院、かたや、いまだ疑惑に胸晴れず、幼い時から考え深く生い立ち、仏道に徹した阿闍梨がほんとうに力説した「俗聖」八宮の尊

さに関心があるばかりの薫、といったぐあいである。この冷泉院と薫の対照的姿は、以後薫が具現していく、罪と宗教心と愛の三竦みの人生を、静かに暗示している。

薫は早くから現世を離れた心持ちに籠りがちであったが、それは、密通の子故に抱いた出生の秘密への疑惑からくる宗教心によるものであった。ところが、その宗教心はそのまま育つことを許されず、そのよってきたるところが消えてなくなるや否や、愛の迷いの試練を受け始める。弁から出生の秘密を明らかに聞かされ、柏木の遺品などを渡されて気持ちの上で一段落ついた薫の心の内に広がったものは、深まった宗教心ではなく、八宮の姫たちを愛の対象として慕う情であった。そして、八宮の三人の姫たちとの実らぬ恋の果てにそれがどうなっていくかは明示されていない。罪の子故の宗教心が愛に先行し、愛の迷いがやがて宗教心へ行くか否かというところである。光源氏にも罪と宗教心と愛はあった。しかし、源氏の罪は自分でわかるものであり、源氏の愛は豊かで大きなもので、紫上という生涯の愛の対象をも得られた血の通ったあたたかいものであり、源氏の宗教心は、地上の生を全うした後、静かに潮の引くように没入していくものである。薫の場合には、三者が全く均等な力で絡み合う。

薫が罪の子故の宗教心に満たされている時、彼に八宮の話題を提供する者があったとしても、それが俗に世間の口が騒ぎたがる傾向のものでは、彼の耳にとまることはできなかったであろう。薫にとって八宮とつながることは、その罪と宗教心と愛の三竦みの世界の幕開きを意味している。罪の子故の宗教心から八宮とつながり、そこで出生の秘密を知るや、やがて八宮の姫たちを通して愛から宗教心へか否かというところを体験していくわけである。その出会いに宇治阿闍梨は欠かせないものになっている。仏道に徹した阿闍梨が「俗聖」八宮の尊さを話題に取り上げたればこそ、その時の薫が八宮に惹かれ、阿闍梨に取次を頼むのであり、そんな阿闍梨はまた、薫の宗教心の深さをもって八宮に紹介するのであって、こうして薫と八宮とがつながるのである。

薫と八宮を結ぶということが、主題の流れの中で宇治阿闍梨に与えられた役割であると考えられるわけだが、彼

はまた、そのように物語の骨組にかかわっているとともに、物語の肉付にも関与している。宇治十帖の世界には宇治阿闍梨のほかに、横川僧都という高僧が登場してくる。宗教的雰囲気の濃いこの世界を代表する二大精神である。彼らを通して追究されている課題は二つある。第一は、宗教的救いに関して法師が人々を導きれるかどうかということで、宇治阿闍梨には八宮が、横川僧都には浮舟がそれぞれ具体的な対象として充てがわれている。結果を見ると、法師の導きに最終的力は与えられていない。それは、救いの問題をあくまで人間全体のものと考える作者の立場であるかもしれない。第二の課題は、法師としての導き方はいかにあるべきかということである。

宇治阿闍梨の仲介で薫と「法の友」の交わりを結んで四年めの秋、八宮は姿籠した阿闍梨のもとで死の床につき、ついに八月二十日の程に亡くなってしまう。阿闍梨は、仏道の方面からの深い尊敬の気持ちによる心寄せのままに誠実に八宮に仕え、病床の八宮の世話や「後の御事」に心を尽くす一方、法師として八宮と姫たちにそれぞれ次のように教える。

「はかなき御悩みと見ゆれど、限りのたびにもおはしますらん。君たちの御こと、何か思し嘆くべき。人はみな御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはしまさず」と、いよいよ思し離るべきことを聞こえ知らせつつ、「いまさらにな出でたまひそ」と、諫め申すなりけり。（椎本の巻）

（父君の亡くなられたお姿なりと今一度、と願う姫たちに、）「いまさらに、なでふさることがはべるべき。日ごろも、またあひたまふまじきことを聞こえ知らせつれば、今はまして、かたみに御心とどめたまふまじき御心づかひをならひたまふべきなり」とのみ聞こゆ。（椎本の巻）

人として子を思い親を思う情を捨てがたいのは当然であろうに、それをこの阿闍梨はきっぱり否定する。人の心のわからぬ法師でもないのだが、仏の道に反することは考えも及ばないというふうである。情に溺れる者たちを、まじめなところ不思議に思って眺めており、ついには、そうじゃないぞと強く諫め、あるいは、静かにはっきり教え

諭している。

このように宇治阿闍梨は、戒律そのものをすでにそこにあるものと受け止めて、それに則って人々を導く。これに対し横川僧都は、きびしい戒律を心に固めることなく常に眼前に照らし出して、自由な心で人々を導く。そのために、それを信じきれているという安易な自覚に陥ることもなく、また、それに束縛されるということもない。戒律というものは、人の心の理想を窮める方向を示すもので、彼はその本来の方向からそれを受け止めているのである。彼が戒律に照らしての反省を口にする時、それは、一大覚悟の重大事ではなく、静かな自省であろう。戒律の示す方向は人の心のためのものであり、彼はそのことを知っているのである。

法師という自覚と自負のもとに、無反省に仏の道との一体感を信じて疑わず、そちらの側から人々に向かって働きかけるという宇治阿闍梨の導き方は、導きの対象八宮が成仏できなかったことで、その力のなさを露呈している。ところで、横川僧都が教え導いた浮舟も頑なな沈黙の中にひとり身を伏せざるを得なかったところを見ると、彼のそれも有効な力を持ち得なかったということであろうか。彼の導きは宇治阿闍梨のそれと違って、導く対象と同じ側で行なわれている。その点、法師である自らもまず人間としての苦悩に身を置き、その上で法師の責任に従っていると言うことができよう。救いの問題を人間全体の側から考えようとしている作者の立場で理想とされているのは、当然、後者であろう。彼の導きはまだ浮舟に有効に働いていないが、この作者のもとで法師の導きに力が与えられるとしたら、彼の場合以外に考えられまい。真に高僧の名に値する高僧を模索して、仏道に徹した心ある法師宇治阿闍梨を描き上げるまでに至ったこの作者は、さらに、自らも一個の人間として立つ法師を理想として、人間的法師横川僧都を描き出している。

かくの如く、宇治阿闍梨は、物語の骨組構成員としても肉付担当係としても、単純に仏道に徹しきれている高僧と設定されることによって、初めてその重要な任務を果たしているのである。

二

さて、宇治阿闍梨が仏道方面の尊敬の念から誠実に八宮に仕えていることは、先にも触れたが、阿闍梨と八宮の山荘との関係はどのようなものであったのだろう。阿闍梨は八宮の法の師で、その方からの親交が深まり、それなりに互いにできる限りの世話をし合っていた。阿闍梨が山荘を訪れることもあったが、姫たちとのつながりはなく、まして、八宮亡き後は、「阿闍梨も、いかがと、おほかたにまれに訪れきこゆれど、今は何しにかはほのめき参らむ。」（椎本の巻〔傍線筆者〕）ということである。八宮のいなくなった山荘への阿闍梨の奉仕については、必ず、八宮へのお仕えのままにそうするのであるという断わり書が付く。阿闍梨の山荘への奉仕は「宮仕」と言われるが（椎本の巻）、それは八宮一家にお仕えするということではなくて、法の交わりを結んだ宮様（八宮）との親交のことであったようだ。

八宮亡き後阿闍梨が山荘を訪れるのは、彼が法師としてなすべきことがある時で、八宮の一周忌の時や大君の病気平癒の祈祷の時には、俄然はりきっていそいそと出て来ている。その後者の場面で、彼は自分の立場を明らかにしている。さしあたって心を尽くすべき対象である大君をさしおいて、八宮のことに心をやっているのである。彼はまず大君にいかがですかと声をかけるが、それは、彼が山荘に来ている理由からして当然の切り出し文句に過ぎず、彼の話の方向は、大君への影響を考慮する必要など端から感じていないかのように、すぐさま八宮のことに移る。そして、八宮が成仏できていないことを知ってあわててできる限りの手を打ちました、と、言いたいことだけ言った後は、いらぬ世間話などせず、「言少なにて」（総角の巻）立ち去る。どんな場合でも阿闍梨の視点は決まっていて、それは常に仏道方面の八宮に向いているようである。

そんな阿闍梨の「宮仕」を具体的に挙げてみると、次のようである。三回描かれているが、その最初は八宮が亡くなった年の暮れのことで、「阿闍梨の室より、炭などのやうの物奉るとて、『年ごろにならひはべりにける宮仕

の、今とて絶えはべらんが、心細さになむ』と聞こえたり。」（椎本の巻）とある。どうぞお使いください、という言い方はされてなくて、あの断わり書が付いている。「心細さ」には、心配であるというのと心寂しいというのと二つの意味があるが、ここの場合、姫たちの暮らしぶりが心配であると取るよりも、八宮の思い出と縁が切れるのが心寂しいというように、八宮を思う阿闍梨の気持ちに中心を置いて取った方が適切であると思われる。この阿闍梨の行為に対して姫たちは、父八宮のやり方を思い出してそのように返礼する。こうした遣り取りは、父八宮と阿闍梨の間で行なわれていたことであり、そう承知していた姫たちには今まで直接関係のなかったことなのである。二回めは、八宮の亡くなった翌年の初めのことで、「聖の坊より、『雪消えに摘みてはべるなり』とて、沢の芹、蕨など奉りたり。」（椎本の巻）とある。ここには例の断わり書はないのだが、次に「斎の御台にまゐれる」とあって、阿闍梨からの贈り物を山荘ではさっそく八宮の御仏前の精進の御膳にさしあげていることがわかる。阿闍梨もそのつもりで奉り、そのことは暗黙のうちに姫たちの了解するところであったのだろう。三回めは、八宮の亡くなった翌々年、大君の亡くなった翌年の初めのことで、本稿で取り上げる贈答歌の詠ぜられるところのことである。

贈答歌と言えば、以上挙げた阿闍梨の「宮仕」の場面では、次に必ず歌の唱和が行なわれている。姫たちが父八宮を思って唱和するのである。歌に込められることで姫たちの心の悲しみがより深く伝わってくるというものであるが、阿闍梨の山荘への奉仕がそうした詠歌のきっかけになっているということは、姫たちにとって阿闍梨が八宮につながる以外の何物でもなかったということであろう。三回めの時には大君が亡くなっているので、姉妹の唱和はできない。その代役を誰がやっているかと言えば、これが詠歌などにまるで無縁の阿闍梨である。阿闍梨のもとから山荘へ贈り物があったら、以後必ず八宮の思い出が展開されているらしい。三回めの時の代役も、だからこそ、もう少しは適役の女房たちもいたであろうその中で、わざわざ最もそれらしからぬ彼が選ばれているのであろう。阿闍梨は八宮とのみつながっていて、そのことは作者も一貫してそのように扱っている。姫たちと接するのは、常

に間に八宮を置いてその上での話であって、それは姫たちも承知している。阿闍梨は確かに宇治の八宮の山荘とつながっているが、内実は八宮とつながっているのであって、彼と姫たちとは常に間接的にしかつながっていないようである。

三

1

そのような状況下で行なわれた三回めの「宮仕」（早蕨の巻）の特徴は、贈り物に添えられることばが詠歌まで加わるのを初めとして内容豊かになっていることである。八宮を追慕する場面のきっかけになるだけでよかった一、二回めと違って、そこの主たる担い手の代わりを務めなければならないという三回め独特の事情が、その裏に一つ考えられるが、特に目立つのは、ひとりぼっちになった中君に対してかなりはっきりと示される阿闍梨の思いやりの気持ちである。「年あらたまりては、何ごとかおはしますらん。」という「おほかた」の挨拶の後に、「御祈祷はたゆみなく仕うまつりはべり。今は、一ところの御ことをなむ、やすからず念じきこえさする。」と声をかけている。阿闍梨の厳格さには泣いたこともあったが、父八宮に対する彼の誠実な奉仕ぶりには、中君も目を向けていたであろう。それに、厳格な法師であるということも、こういうことでは逆に頼もしさを感じさせるものかもしれない。その誠実な人柄を受け入れている人からの頼もしいことばとなれば、ここでの阿闍梨のことばは中君にとって大きな慰めとなったのではなかろうか。そうであれば、阿闍梨の気持ちが十分伝わったことになる。阿闍梨は、さらに、不慣れな歌をせいいっぱい詠み、その真心は中君を感動させる。

阿闍梨の厳格さと誠実さとは、当然のことながら何ら矛盾しない範囲で現われている。彼は単純に仏道に徹した厳格な法師である。八宮の死に際の心配を、「君たちの御こと、何か思し煩くべき。人はみな御宿世といふもの異

々なれば、御心にかかるべきにもおはしまさず。」と言って突っぱねるのも、八宮の気持ちを汲んで、彼の死後、人それぞれに定まった宿世にできる限りの幸運あれかしと姫たちのために祈るのも、法の交わりを結んだ八宮に対して示す誠実さにほかならない。彼は、八宮のいない女だけの山荘を、しかるべき用なくして訪れるということなど全く考え及ばないし、姫たちの生活方面の世話をくどくどやくということなども思い寄りもしない。彼なりの思いやりというものは、実生活に関係した蕨・土筆といった贈り物に直接添えられることばには係わりを持たないようで、特別である三回めのこの時でも、それは一、二回め同様とおりいっぺんのただ一言、「これは童べの供養じてはべる初穂なり」である。

2

以上の考察を踏まえて、次にいよいよ阿闍梨の歌について考えていきたい。阿闍梨の歌は、

君にとてあたまの春をつみしかば常を忘れぬ初わらびなり

というもので、この歌で問題になるのは、「君にとて」の解釈である。諸注によれば、大きく二つに、小さく三つに分かれる。『対校源氏物語新釈巻五』（吉沢義則氏、昭和二七年。以下「対校」と略す。）・『日本古典文学大系本巻五』（山岸徳平氏校注、昭和三八年。以下「大系」と略す。）では、「中君あなたに」となっており、『日本古典全書本巻六』（池田亀鑑氏校注、昭和二九年。以下「全書」と略す。）では、「あなた方のためにと」となっており、『源氏物語評釈巻十一』（玉上琢弥氏、昭和四三年。以下「評釈」と略す。）・『日本古典文学全集本巻五』（阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏、昭和五〇年。以下「全集」と略す。）では、「八宮のために」となっている。これを一覧表にまとめると次のようになる。

「君にとて」→「初わらびなり」　　「君にとて」→「（あまたの春を）つみしかば」

中君あなたに　　あなた方のためにと　　八宮のために

「君にとて」の「君」を、中君と取るか八宮と取るかが、大きな分かれ目であるが、その中では「全書」の解釈が独特である。これはどういう立場をとるのであろうか。阿闍梨の「宮仕」の相手が、八宮一家ではなく八宮であることは、先に見てきたとおりである。二回めのそれが、すでに八宮が亡くなって姫たちだけになっている所へなされたことから、「あなた方のためにと永年摘んで献上した」とするのであれば、それは、この阿闍梨をよく理解していない近視眼的解釈と言わねばなるまい。それとも、中君の傷心を慰めようとする気持ちの現われを、「対校」や「大系」のように直接の言いかけと取るほどに強くではないにしろ、阿闍梨に認めているということであろうか。それならば、それらと同時に論じられる。

さて、二つの解釈に決着をつけるポイントは二つある。歌自体のことばの続きぐあいと、歌の詠まれた背景とである。前者から言うと、「君にとて」は「つみしかば」にかかる方がごく自然であると思われる。たとえば、古今集の「君が為春の野に出でゝ若菜摘む我衣手に雪は降つゝ」（春上）という歌の「君が為」が「若菜摘む」にかかるように。後者から言うと、阿闍梨の人柄、詠歌態度が問題になってくる。ここ三回めの「宮仕」の場面では、珍しく阿闍梨の中君への思いやりの気持ちがはっきり示されていたが、それは、仏道の方面の祈祷の件と、慣れない歌を詠むということにおいてであった。中君も、歌にというよりは、阿闍梨が苦心して詠んだのだろうと思われるところに、彼の真心を感じ取っている。そして、実生活につながる贈り物に直接添えられることばは、従来どおりのとおりいっぺんのものであった。この歌の内容も、実生活につながる贈り物を詠むものである。その中身たるや、

形ばかりは歌ながら、一回めの「宮仕」の場面で、「炭などのやうの物」に添えられたことば「年ごろにならひはべりにける宮仕の、今とて絶えはべらんが、心細さになむ」に、変わるところがない。「君にとてあまたの春をつみし」とは、「君のためにといって初蕨を摘んだ」ということと同時に、総角巻頭のことば「あまた年」にも照応して「あまたの春を積んだ」ということで、それこそ「年ごろにならひはべりにける宮仕」であり、「常を忘れぬ」と詠む心の内は、「今とて絶えはべらんが、心細さになむ」というのにほかならないのである。「君にとて」に、中君に対する阿闍梨の思いやりの気持ちの具体的現われを見ることは、少々無理なことであろう。このようなことから考えて、「君にとて」の「君」は、八宮と取った方がよいと思われる。

3

この阿闍梨の歌に答えて中君が詠むのが、

この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰のさわらび

という歌である。この歌の問題点は、「なき人のかたみにつめる」というところにある。これについては、「亡き人の形見に摘める」と取って、「亡き人（＝八宮）の形見として摘んだ」と解する注が大部分である。その際、「かたみ（形見）」に「筐（かたみ）（＝竹で編んだ目の細かい籠）」をかけるとする。対する注は「対校」で、「なき人」を「かたみ」の枕詞として（亡き人ー形見）、「筐に詰める」と取り、「籠に入れて下さった」と解する。その場合には、「つめる」が、他動詞マ行下二段活用「つむ（詰む＝満たす。いっぱい入れる。）」の連体形「つめる」ということになり、「つむる」に対して一般的な活用ではないことになる。

この部分は、いったいどのような場面を展開するのであろうか。「対校」のように「筐に詰める」と取るのは、「をかしき籠に入れて」奉ったという実際の状況を前面に出したものである。「亡き人（＝八宮）の形見に摘める」

と取るのは、内の意味合いを前面に出したものである。歌に慣れている中君の側から考えると、実際の状況に内の意味合いを加味して歌を詠むということは、傷心の極にあるとはいえ、自然なこととしてできるであろう。しかし、そんなものには全く不慣れな阿闍梨の目には、はたして中君の歌がどう映ったであろう。「なき人の」が、単に枕詞として見過ぐされるものであろうか。「なき人のかたみに」は、すぐに「亡き八宮の形見として」と意識されるのではないだろうか。それが阿闍梨の気持ちであったのだから。さらにまた、中君自身も、蕨などの奉られた状況にではなく、阿闍梨の真心に感動しているのであり、中君の詠歌の際の気持ちとしても、きっかけに使った実際の状況よりも内の意味合いに重点を置いていたことだろう。このように考えていくと、「なき人のかたみにつめる」は、「筐に詰める」ではなくて、「亡き人の形見に摘める」という場面を展開したものと思われる。

さて、では、「亡き人の形見」と詠む中君の気持ちは、どのようなものであったのだろうか。「大系」「評釈」「全集」によると、阿闍梨が奉った早蕨が八宮の亡くなった山の峰のものであることから、中君がそれを八宮の形見と見ていると説明されている。しかし、「亡き人の形見に摘める」というのは、「あなた（＝阿闍梨）が亡き人の形見に摘める」ということである。先の形見の見方が成り立つとすれば、そこだけ中君の視点ということになって、「摘める」の動作主と異なってくる。いったい中君はどう歌っているのであろうか。

㈠奉られた早蕨に自分なりの思いを託してか。

㈡阿闍梨もそう思って摘んでくれたのだと思い込んでか。

㈢全面的に相手の気持ちを受けてか。

形見の見方で視点を占める人と、「摘める」の動作主とを一致させた場合を考えると、形見は阿闍梨の視点で捕えられたものということになり、それは、阿闍梨の心の中にある八宮との親交の名残りということになる。そして、そうなると、阿闍梨の歌の「君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ」を直接受けて、中君が「なき人のかた

みにつめる」と歌ったということになり、これがつまり、㈢の場合である。

中君は阿闍梨の歌に接して、「大事と思ひまはして詠み出だしつらむ、と思せば、歌の心ばへもいとあはれにて、（中略）こよなく目とまりて、涙もこぼ」れるほどに感動した。この深い感動は、先の㈠㈡㈢のどの場合に最もよくつながるであろうか。㈠の場合、中君本人の側に大半の気持ちがある。相手阿闍梨に返しているものは、わずかに「つめる峰のさわらび」ということだけである。これでは、中君の深い感動の根拠とするに不十分であろう。㈡の場合、全くの誤解で、心の触れ合いも何もあったものではない。㈢の場合、中君の側で相手阿闍梨の心を十分に受け入れていることが想像される。阿闍梨の姫たちへの対し方が、八宮との関係を通じてであったこと、そして、姫たちもそれをわきまえていたこと、それらがここの成立事情のすべてである。中君が「亡き人の形見」と詠むのは、先行する阿闍梨の歌に詠まれた、阿闍梨の山荘に接する態度ー法の交わりを結んだ八宮との関係が根本になっているーを、そのまま受けてのことである。そこまでの心の触れ合いを考えて初めて、中君の深い感動も理解できるというものであろう。

終わりに

「君にとて」「なき人のかたみにつめる」「なき人のかたみ」を以上のように考えることによって、二つの歌の対応の妙は窮まる。阿闍梨は、一大決心の末に、ひとりになってしまわれた中君のために歌を詠む。しかし、それは、中君が返歌で「なき人のかたみにつめる峰のさわらび」と受ける以上の何かを持つというものではなく、「この春は誰にか見せむ」と詠む中君の気持ちを察しきれていないと思われるものである。が、この阿闍梨の場合、歌を詠むそのことに大きな意味があるのであって、中君にもそれはよくわかっており、「大事と思ひまはして詠み出だしつらむ、と思せば云々」という感動につながるのである。

仏道の方面で見せる鮮やかな手際は見られないが、なんとか中君の傷心を慰めようとする阿闍梨の思いやりは、十分中君に通じている。通じていればこそ、中君も、心を察しきれていないと恨みがましく返歌を詠むのではなく、心を許して、大君にも死なれてひとりになってしまった現在の心情をすなおに詠むのである。そして、それでこそ、中君の心も少しは慰むのである。

（岡山大学大学院文学研究科）